

先人の足跡に学ぶ

伊藤 良 夫



のために練習問題を作る、部活が遅くなれば生徒を家まで送り届けてやる、仕事のやり直しを命じられれば、これで自分が磨かれていくのだと信じ何度でも取り組む等々、はたから見ればなにもそこまで思うことを積極的にそして地道にやり抜いていったそうさ。だからこそ、仕事も着実に覚えていったし、そんな献身的な先生に生徒も逆らえないといった状態を作り出すことができたのだと友人は見るのである。

私はこの話を聞いて、自分が恥ずかしくなり、願わくは、その先輩のような教師になりたいと切に思ったのだ。

まだまだ未熟な私であるので、今なお、生徒たちの中学生とも思えぬ行動や、自分の仕事の不手際に、いらついたり、めげたりすることが多々ある。しかし、教師という道を選んだのは他でもない私なのだ。自分の選択に責任を持ちたいと思う。幸い、私の周囲には、私を教師として育てて下さろうとしている先生方があまたおられる。その厳しく温かい助言・指導を受けて少しでも教師として成長していきたい。仕事や生徒に対する「誠実さ」を忘れずに……。

明日もまた忙しくなりそうさ。

(福島市立福島第一中学校教諭)

人は進んでこの作業を引き受けた。私はこの二人の姿を見ていううちに感無量となった。何かしら胸にじんときみあげてくるものがあつた。思えば、三年前に本校に赴任して来たころにはとても考えられなかった光景であつた。

彼等は別の仕事でも私たち教師の手順が悪いと、そばに寄ってきて顔を真っ赤にして怒鳴つたりする。そんな時はよく話を聞き、そのあと彼等に仕事を頼むと実に手際よくやってくれる。私が感心し、ほめてやると満足して引きあげていく。今では話せばわかる集団になつてきた。(もちろん、目を離すことはできないが……)

私が僻地といわれるこの学校に赴任するとき、諸先輩からご指導をうけた。それは、「生徒との対話を工夫しなさい。地域の人々の中に飛び込み、保護者の信頼をかち取りなさい」「過疎に悩む小規模校のあり方を勉強してきなさい」などであつた。

私は、「今までに培つてきた二十年以上の経験を生かせばなんとかなるだろう」そう思つてやつて来た。しかし、この考え方は甘かつた。都市部での生活が長い私には理解できないことが次々と出てきた。地域住民の期待に応えること。都市志向が強い中で地元高校である本校への入学を定着させることはなかなかむずかしい課題のようであつた。

加えて、集団のリーダー養成、絶えず私たちを悩ます生徒指導、そして個

別指導に重点を置いた授業の充実などやらねばならないことが山ほどある。毎日がかげ足であり、気がつくといつても夜の七時になつて来た。保護者は夜でないかと家にはいないし、しかも九時には寝てしまう。家庭訪問のタイミングが実にむずかしい。

最初の一年間は仕事に追いかける毎日であつた。「これでは良い成果は生まれてこないだろう。こちらから仕事を追いかける状態にもつていかねばだめだ。それにはどうしたらよいか」半年間、このことで悩んだ。そんなある日、「この地にきた先輩の先生方はどのような生活をしていただろう。先人の足跡に解決のヒントがあるのでないか」そう思い調べてみることにした。学校に残つている資料、地元の方々から聞いた話、それらは途方に暮れていた私に示唆を与えてくれるものばかりであつた。

一、教師の基本姿勢を失わないこと。
二、地元の人々に迎合することではなく温い心で生徒や保護者に接すること。

三、情報を豊かに集めて正しい判断を下すこと。

このことを続けていくことによつて道は開けてくるにちがいない。肩肘を張ることなく、あきらめることなく、くりかえし、生徒指導を続けていくことだと思ふ。

冷に耐え、苦に耐え、煩に耐え、